

## 第2章 事例研究

### 1. 3歳児の事例

西多 由貴江

#### 事例1 「お隣へ。はい、お隣へ」

11月8日（火）

教師がボールを投げ、U児がボールを打つということを繰り返していると、N児、K児、T児、M児、J児、O児、R児、Y児らが集まってきた。教師がボールを投げて、幼児らが順番にボールを打つというルールができた。しかし、教師がボールを投げると、「次、俺」「次、私」「もう一回投げて」など、言い合いが始まってしまった。

教師 「先生一人だから、いっぺんにみんなには投げられないよ。どうしたらいいかな」

J児 「順番」

Y児 「そうやな」

まわりの幼児もその考えを受け入れたようだったので、

教師 「かけっこの時（運動会の個人走）みたいに順番にするってこと」

幼児らは「そう」と、何も言わなくても一列に並び始めた。しかし、打ち終わった幼児がまた前に並んだり、隙間に入ったりで、うまくいかなかった。

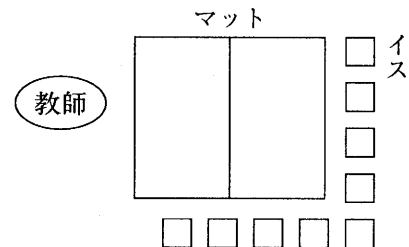
教師 「いいこと考えた。（椅子をもってきて並べて）ここに座って待つことにしよう。次にやる人がこの場所ね。終わった人は一番後ろに座ろう」（指を差しながら伝えた）

Y児 「いいね」

N児 「俺、ここ」

K児 「僕、隣」

M児 「おもしろい」



などと言いながら、幼児らは自分の好きな椅子に座った。先頭に座っていたU児から順にボールを打つことになった。U児が終えらと、教師が「お隣へ」と声をかけながら一人一人の幼児らを順番に動かした。何度か繰り返しやっていると、少し意味がわかってきたようで、自分たちで並ぶことができるようになってきた。M児の番が終わると、

N児 「お隣へ。はい、お隣へ」

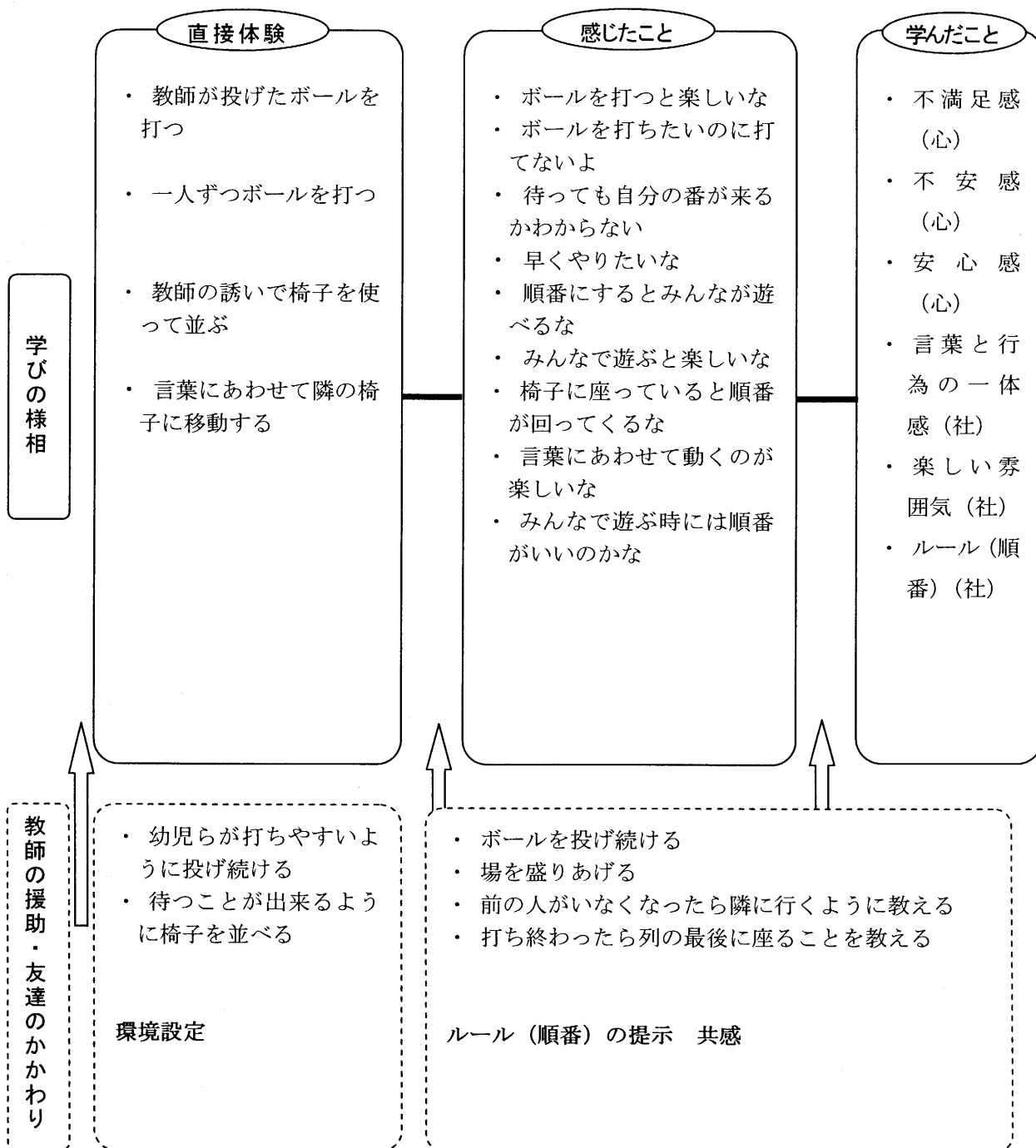
と、幼児を順番に隣に移動させた。M児は一番後ろの椅子に座ったが、幼児の数より椅子の数の方が多かったため、最後尾のK児とM児との間に空席ができた。

K児 「M児、こっちこい。そこ（間の椅子に）誰もおらんやろ」

と伝えるが、M児には伝わらなかった。K児とN児はM児の手をもって「こっちやって」と、自分達の隣に座らせた。

お隣へ作戦は成功し、しばらくの間、野球ごっこをみんなで楽しんだ。

<「学び」の様相と教師の援助>



<今後に向けて>

- ・ 友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じることができるよう、教師も一緒に遊びながら、ルールを提示したり、場の雰囲気を盛り上げたりしていく。

テラスで数人の幼児がカブトムシやクワガタの面を身につけ、ロフトをムシの森に見たてて、ムシキングごっこを楽しんでいた。N児がロフトの壁から上にのぼりながら、K児に話しかけた。

N児 「木に登ってみ。落ちないから。木にのぼってみ」

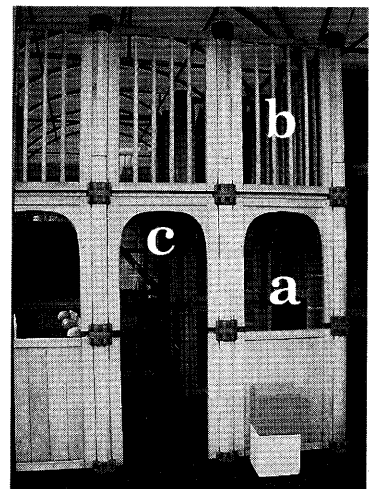
その言葉につられた、K児が壁の前にジュニアブロックを二つもってきて並べた。立方体のジュニアブロックを積み重ねて、その上に登り、ロフトの窓（aの地点）まで登ることができるようになった。N児が窓の所まで降りてきて、K児に見せるようにもう一度、柵の所（b地点）まで登って見せた。そこでK児はN児と同じように手で柵を握り、足を振り上げてよじ登ろうとしたが、登ることができなかったので、あきらめてその場を離れてしまった。

その様子を見ていたC児が同じように、K児の真似をして窓の所（a地点）に登り、「登れた」と満足げに教師に話しかけていると、再び、K児が近づいてきて、さっきまで使っていた積み木を窓の下に積み直した。そして、教師の様子を見ながら窓の所に登った。

教師 「K児君も挑戦です」

K児は、教師の方を一度見て再び登り始めた。窓の所からはダメだと考え、上の柵を握りながら中央（C）に移動し、両足を柱に引っ掛け登り始めた。

教師 「手の力も使って。足の力も使って。もう一息。  
足を引っかけて」



その言葉を聞きながら、K児は繰り返し何度も挑戦した。手や足の位置を少しずつ上に動かしながら、足を柵に引っ掛けようとするができない。そのたびに「あっ」と、暗い表情になったが、続けて挑戦していた。顔を真っ赤をしながら、何度もやっているうちに、足を柵に引っかけることができた。そして柵のところ（b地点）にたどり着くことができた。その様子を気にして見守っていたN児は「ここ、俺たちのうちや」といいながら、2階からK児に話しかけた。

教師 「やった。K児君登れた」

と、教師が大喜びしていると、K児はほっとした表情になったが、すぐに下を見て、そわそわし始めた。

教師 「K児君、降りる時が問題だよ。N児君、いつも降りる時どうやって降りてる」

N児 「簡単や。そんなの」(2階からK児の姿を見ていた)

その言葉を聞いて、K児は自分の力で下に降りようと足を下に伸ばした。しかし置くところが見つからずにもとの体勢に戻った。

教師 「手と足の力が必要だよね」

N児 「そうだな。・・・まず足を(窓の所に)つける」

K児は柵の下の方を握り、何とか足を窓の所にのせることができた。しかし、そこからすぐには降りることができず、積み木の上に降りた。

教師 「K児君降りれた。すごい」

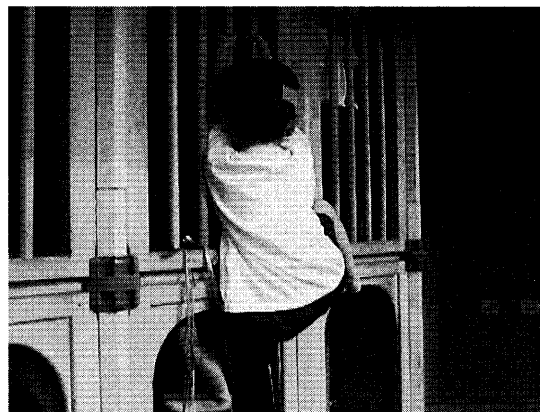
N児 「なんでK児君、あれ(積み木)使わんと登れんが」

K児は、下に降りることができてほっとした表情で教師の方を見たが、N児の言葉を聞き、一瞬動きが止まった。そこで教師はN児に「少しずつ登れるようになるよ。きっとK児、積み木なくても登れるようになると思うよ」と、声をかけた。K児はその会話を聞くとすぐに積み木を遠くに蹴り、自分の力で窓の所に登った。そしてすぐに先ほどと同じように真ん中に移動し、上に登ろうとするが、足が滑ってなかなか登ることができない。しかし、何度か挑戦した後、柵に足を引っかけて登ることができた。その様子をN児は上からずっと見ていた。

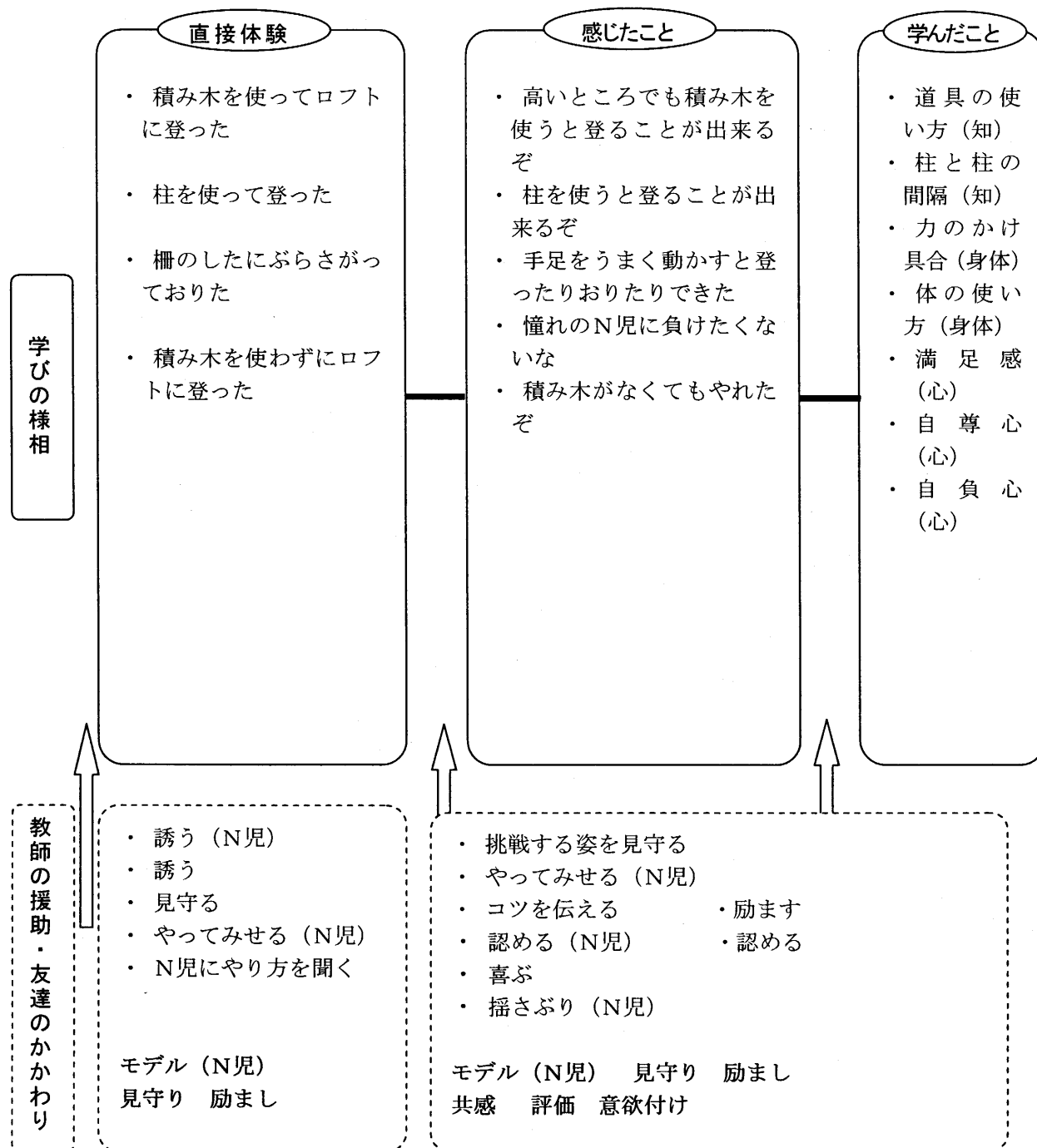
N児 「K児君、やっと登るのができたな」

教師 「K児君、やったね」

K児は教師に向かって、「初めて登れた」と、笑顔で答えた。



# <「学び」の様相と教師の援助>



## <今後に向けて>

- ・ 揺さぶりを起こす友達の存在は大切である。しかし、それが幼児らの上下関係にならないように気をつけていかなければならない。

（記録：寺澤 友里）

前日（8日）、A児が「うさぎさんとくまさんつくりたい」と教師のもとへやってきた。自分では絵を描けないというので、教師が白い紙にうさぎとくまの顔の輪郭だけを描いたものに、目や鼻や口を描き込んで、嬉しそうに持って帰った。この日も、A児は教師に声をかけてきた。

A児 「うさぎさんとくまさんつくりたい」

そこで製作コーナーへ行き、教師はA児と一緒に白い紙とマジックを準備した。

教師 「A児ちゃん今日は自分でかいてみたら？」

A児 「やだ、先生がかくの」

教師 「そう？ A児ちゃんがかいたほうがすてきなことになるかもよ」

A児 「かけないー！」

教師 「そっかあ。じゃあ一緒にかこう」

まずは顔の形を描くように促したが、うまく描けずなかなか満足がいかない。そこで教師が手を添えて、小さな丸を描いた。

教師 「そうそう。じゃあ長い耳つけてあげようか。ここにこうして」

指で示してあげると、ひとりでも耳をうまく描くことができた。

教師 「すごーいかけたね。じゃあ最後に顔かこう」

A児は顔を書き込むと「切る」と言い、ハサミでうさぎの顔を線に沿って切り取ろうとするが、すぐに「切れないー」と諦めてしまった。そこで教師が大まかに切って、A児に手渡した。するとA児は再び挑戦しはじめた。すると細かいところまでうまく切り取ることができ、嬉しそうにカバンにしまいに行った。

A児 「くまさんつくりたい」

教師 「つくろっか。じゃあまた最初に顔の形かいて」

A児 「かけないー！」

教師 「うさぎさんみたいなまあい顔だよ」

今度はひとりで少し大きめの丸が描けた。

教師 「くまさんの耳はどんなの？」

A児 「わからない」

教師 「まるいかな？さんかく？」

A児 「まる…でもないしさんかくでもない！」

教師 「どっちでもないかー。むずかしいね」

A児 「こんなの」

そう言ってA児は自分でくまの耳をかいた。

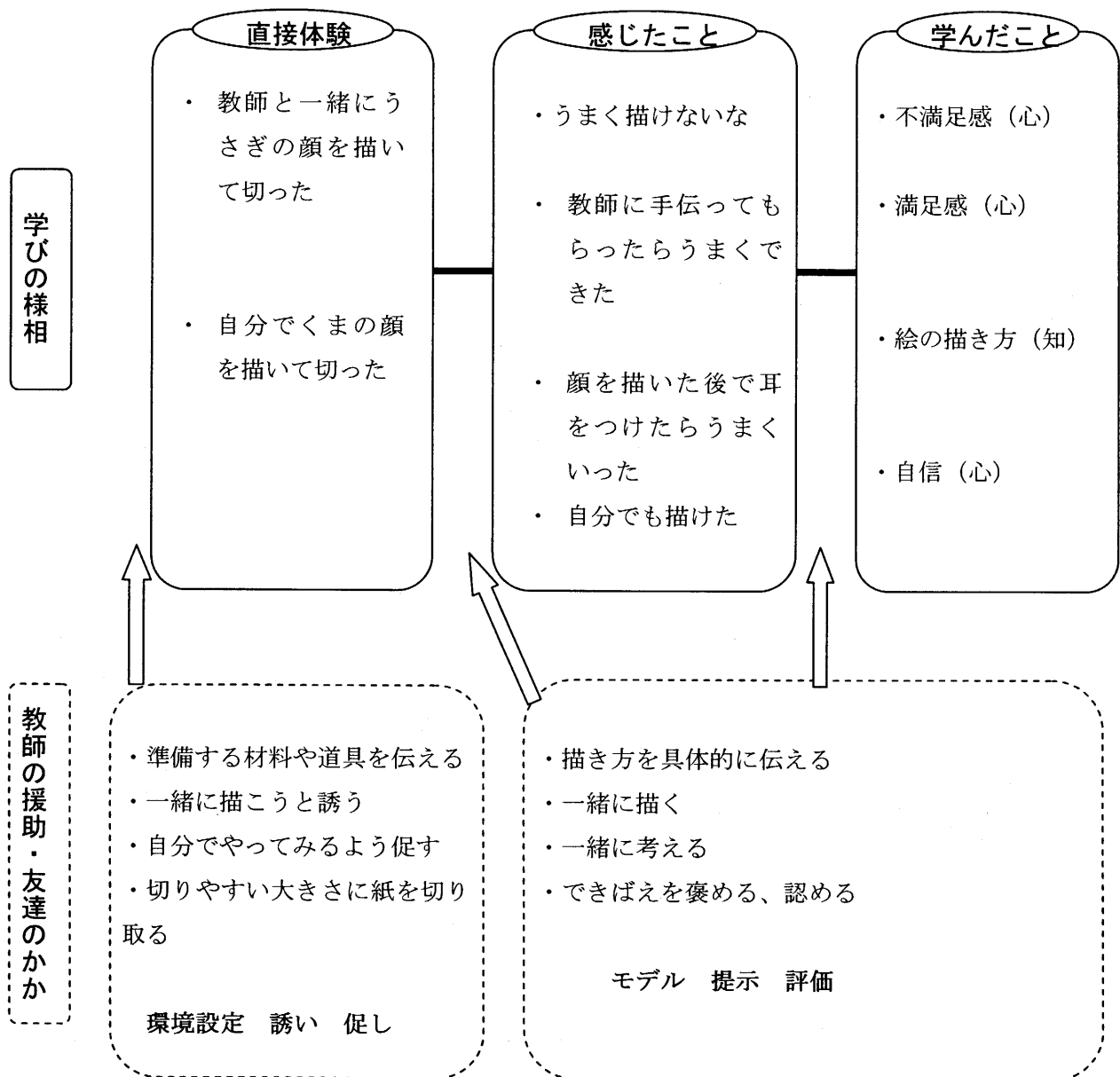
教師 「すごいじゃない、じょうずじょうず」

顔も描いて切り取ると、再び「カバンに入れてくる」と嬉しそうに持っていった。





<「学び」の様相と教師の援助>



<今後に向けて>

- ・ 自分のペースで一つ一つ身につけていくA児の姿を認めながら、自分でつくる楽しさを感じられるように手助けしていきたい。

（記録：寺澤 友里）

A児は、この日も「うさぎさんとくまさんつくりたい」と教師のもとへやってきた。絵を描くことやハサミで切ることには大分慣れ、色使いなどを工夫して楽しんでいたが、教師が他の用事に手を取られている時にも「先生とつくる」と言ってずっと待っていることが多かった。

A児 「うさぎさんつくるー」

教師 「じゃあつくろう。A児ちゃんうさぎさんつくるんだって」

そばにいたH児、M児、J児らに声をかけると、H児は「H児も」と紙とペンを持ってきて、すらすらとうさぎの絵を描き始めた。それを見ていたA児も、慣れた様子でうさぎを描き、「切る」と言って切り取り始める。M児、J児も描き始めた。

H児はうさぎの顔の横に長いベルトのようなものを描き、丁寧に色を塗っている。

教師 「H児ちゃん、これなあに？」

H児 「うさぎさんのお面」

教師 「なるほどー。お面なんだ、いいね。A児ちゃん、ほら、H児ちゃんお面にするんだって」

A児 「A児もお面にする」

そう言ってA児は切り取ったうさぎを教師に手渡した。

教師 「A児ちゃんも自分でつくってみたら？こんなH児ちゃんみたいに」

A児 「つくれないー！」

教師 「じゃあH児ちゃんにどうやってつくるかきいてみよっか」

A児 「うん」

教師 「H児ちゃん、A児ちゃんもお面にしたいんだって。どうやってつくったらいいかねー」

H児 「（ベルトを指して）こんなくつつけるんだよ」

教師 「A児ちゃんに教えてあげてくれる？」

H児 「いいよ」

H児は自らペンをとり、A児のお面につけるベルトをつくり始めた。A児はわくわくした様子でそれを見つめている。色を塗り始めると、「ピンクだあ」と嬉しそうである。H児はそれを切り取り、A児のうさぎの両サイドにセロテープで貼り付け、さらに丸くして後ろ側をセロ

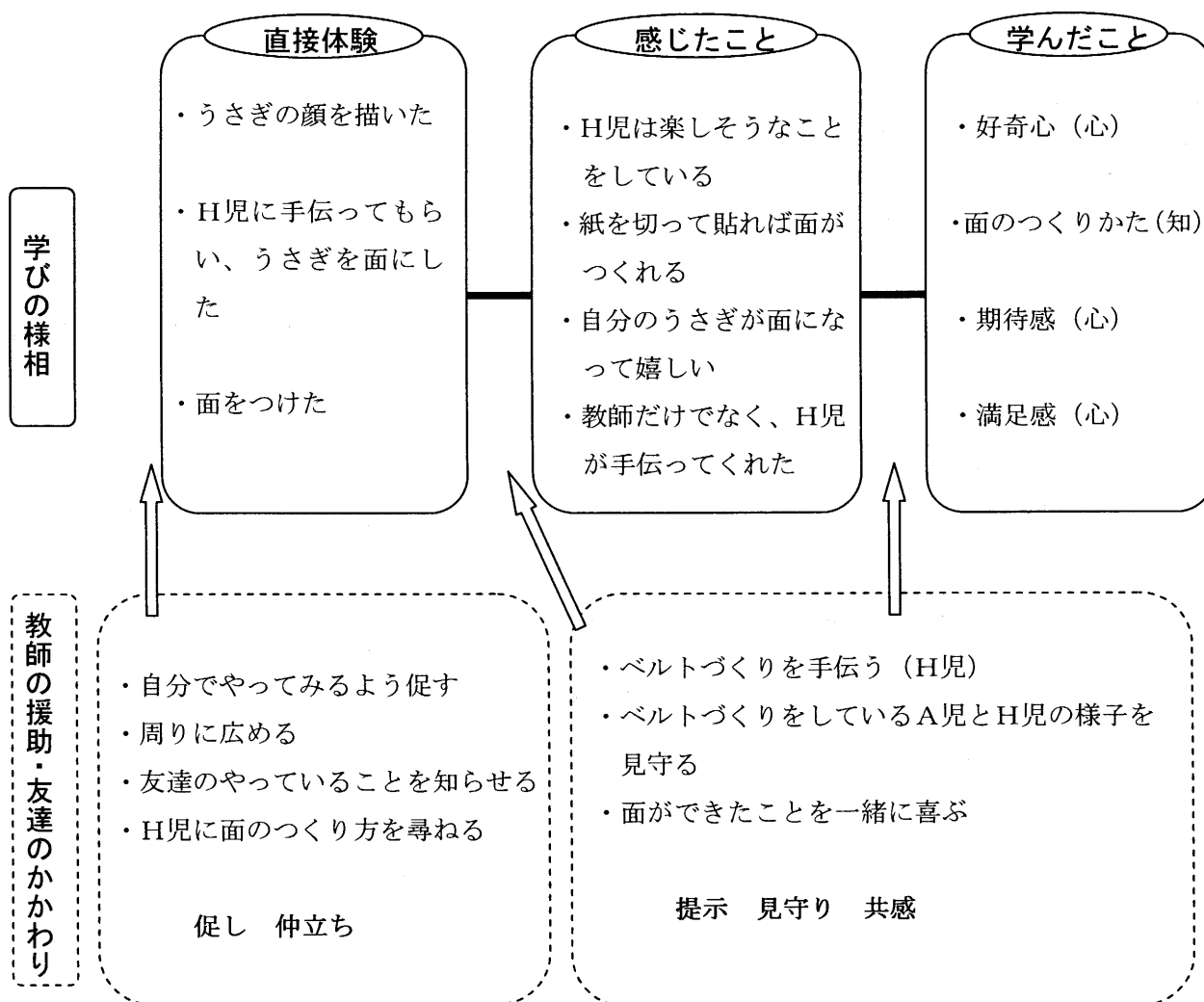
テープでとめた。

H児 「できた！」

教師 「やったあ、A児ちゃんはめてみて」

H児がお面を頭にはめてあげると、A児は満面の笑みでありがとうを言い、すぐにカバンに入れに行った。

### <「学び」の様相と教師の援助>



（記録：寺澤 友里）

A児はくまの絵を描き始め、その横でH児がドレスの絵を描いていた。

教師 「かわいいね。あ、いいこと考えた。A児ちゃんのくまさんにもかわいい洋服着せてあげたら」

A児 「うん。でもかけない」

試しにちょうどH児が切り取ったドレスをA児のくまにあてがってみた。するとH児はそれをそのままA児のくまにセロテープで貼り付けた。

H児 「かわいいー」

A児 「いひひひ」

H児 「H児足つくる」

A児 「じゃあ手つくる」

二人であれこれ話しながら、どんどんできあがっていく。どうやらお姫様のイメージらしい。

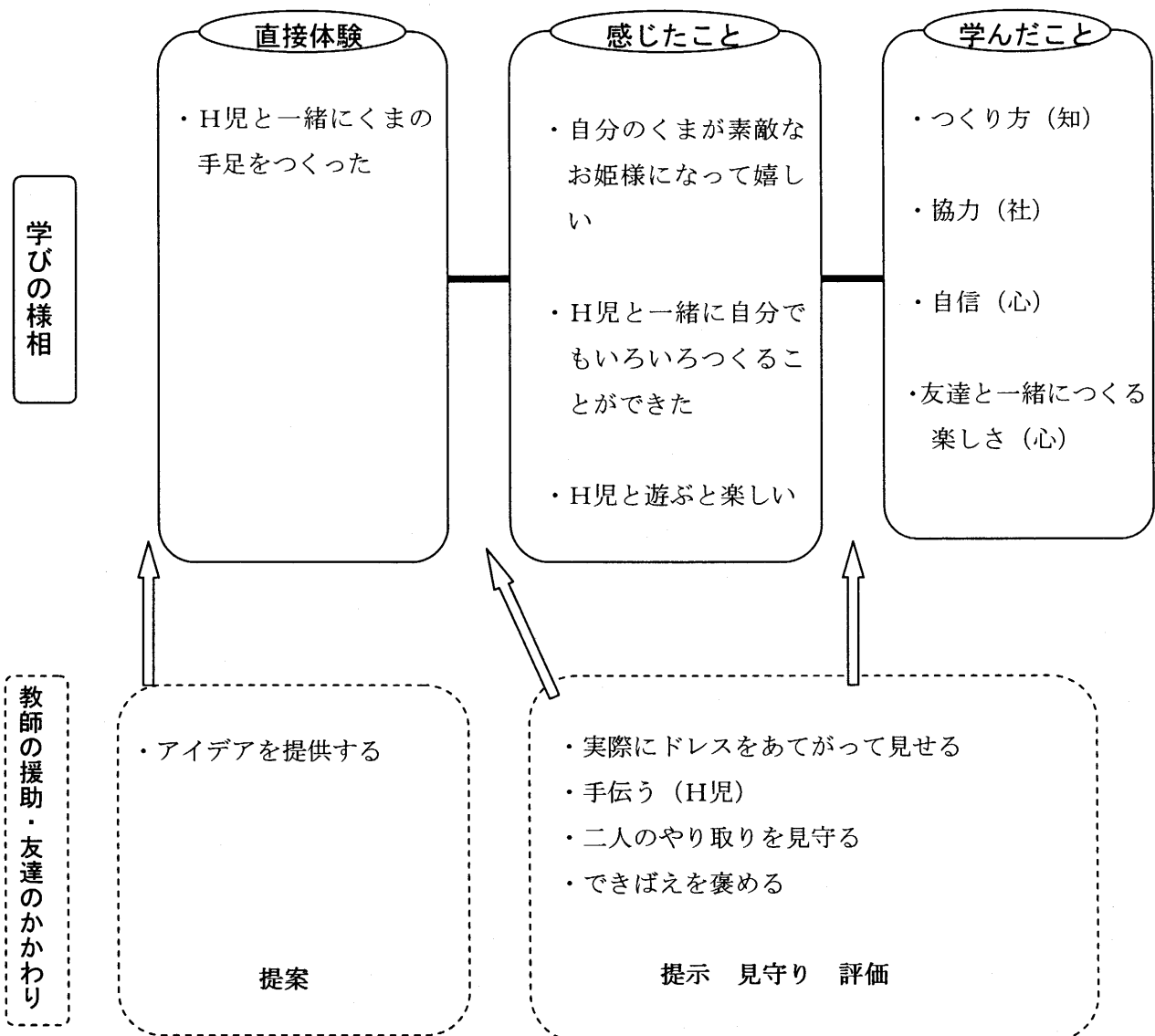
H児 「できた！」

A児 「できた！」

教師 「おー！いいのになったね」

二人は完成したくまを大切そうに持って、A児のカバンに入れに行った。その後も「パズルしよう！」と二人で遊びに行った。

<「学び」の様相と教師の援助>



<今後に向けて>

- ・ A児が興味をもっているものを見つけ、提示したり、一緒につくったりしていく。
- ・ 今後も、製作コーナーにいる友達に目を向けるだけでなく、友達とのかかわりを楽しめるように援助していきたい。

テラスでT児、K児、Y児は、教師と一緒にソフトブロックでジャンプ台をつくり、そのジャンプ台の上からマットに飛び降りることを繰り返し楽しんでた。O児、R児、F児も加わり、マジレンジャーの面やマントを身につけてマジレンジャーになりきってジャンプしたり、飛び降りるというその行為を楽しんだりしていた。教師が声をかけなくても、一人一人順番に飛び降りることを、繰り返し楽しみ始めたので、その場を離れた。しばらくすると、

Y児 「10. 9. 8. 7. 6. 5. 4. 3. 2. 1. 0、はっしゃ」

という声が聞こえてきた。何があるのかと様子を見に行くと、Y児がジャンプ台の前に立ち、ジャンプ台の上の幼児が飛び出さないように両手をあげて、叫んでいた。「はっしゃ」と言うとともに手を降ろし、体をどかし、飛び出す合図を出していた。

T児 「せんせーい、みて。(ジャンプ台の上に登りながら) おれ、かいてんできるよ」

Y児 「10. 9. 8. 7. 6. 5. 4. 3. 2. 1. 0、はっしゃ」

T児は、ジャンプ台から飛び降りながら体を反転させ、後ろ向きにマットの上に着地した。

教師 「おー、T児ちゃんすごーい」

T児は満足げな表情を見せ「もっと回れるよ」と、もう一度ジャンプ台の列に並んだ。その後、K児、F児らも、マットの上に着地すると前まわりをしたり、飛びながらポーズをとったりと、思い思いのジャンプを楽しんでいた。そのたびに教師が「すごい」「かっこいい」などと言葉をかけていた。その間もY児は「10. 9. 8. 7. 6. 5. 4. 3. 2. 1. 0、はっしゃ」と飛び出す幼児らに合図を出していた。しかし突然、そばにいたK児に声をかけた。

Y児 「K児くん、10. 9. 8. 7. 6. 5. 4. 3. 2. 1. 0って言って」

K児 「えっ？」

Y児 「ここで(自分が立っていた場所にK児を移動させて)、10. 9. 8. 7. 6. 5. 4. 3. 2. 1. 0って言って。おれもとびたいし」

K児 「わかった」

Y児はみんなが飛ぶ様子をみていて飛びたくなったので、そばにいたK児に声をかけ、ジャンプ台の列に並んだ。その後、K児が出発の合図を出すことになった。次はO児の番である。

K児 「10. 9. 8. 7. 6. 5. 4. 3. 2. 1. 0」(小さい声でかぞえた)

つかさずY児は「もっと、大きい声で言って」と、きつい口調で言った。どうなるのかと思っ  
て見ていると、

K児 「10. 9. 8. 7. 6. 5. 4. 3. 2. 1. 0」(顔を真っ赤にしながらも、さっきよりも  
大きい声で唱えた)

O児 「はっしゃ」

K児の大きな声につられるように、O児も大きな声で叫び、思いつきとんだ。O児が飛ぶ  
のを見て、K児もほっとした表情になった。

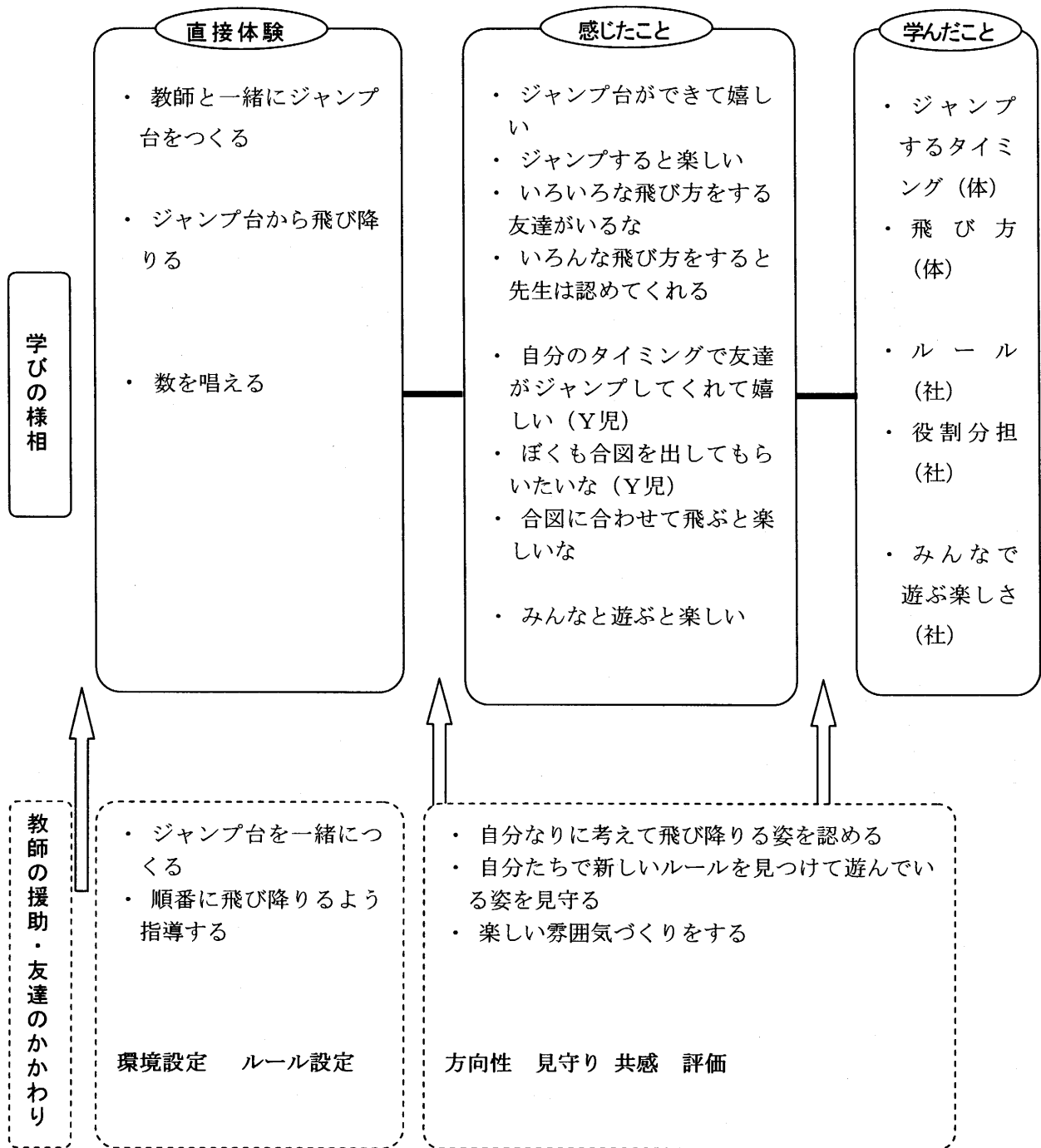
教師 「(飛ぶ人が)『はっしゃ』って言うのいいね」

K児 「10. 9. 8. 7. 6. 5. 4. 3. 2. 1. 0」(さっきよりも大きな声で、自信をもって  
唱えた)

Y児 「はっしゃ」

と、Y児も大きな声で叫びながら、マットの上に飛び降りた。その後も、K児ちゃんの合図  
で、F児、T児、O児、R児、Y児らが順番に「はっしゃ」と、飛び降りることを楽しんだ。

<「学び」の様相と教師の援助>



<今後に向けて>

- ・ 自分たちで遊びの場をつくり、友達と集って遊ぶことができるように、教師がモデルとなり楽しんでいく。



E児、D児がプリキュアの衣装を身につけて、音楽に合わせてダンスを楽しんでいる。側でスカートをはいて、お姫様ごっこをしていたG児、P児、B児らも加わり楽しんでいた。さらに、U児、R児のマジレンジャーも加わり、マジレンジャーショーとプリキュアショーをすることになった。以前にやったことを思い出し、そばで遊んでいた幼児らも一緒に椅子を並べて客席をつくり、プリキュア・マジレンジャーショーが始まった。S児は登園時の活動に時間がかかり、スカートを身につけることが出来なかった。しかし、にこやかな表情で様子を眺めていた。

教師 「マジレンジャーのCDないかな？」

R児 「いいね」

と、R児、S児らと一緒にすみれ組(4歳児)で借りてきた。マジレンジャーの音楽に合わせて戦いショーが行われた後、プリキュアショーが始まった。しかし、舞台にたった女児らは、ほとんど動かなかった。教師が「E児ちゃんとD児ちゃんはダンス名人だね」と、声をかけると少しずつ体を動かし始めた。側でその様子をみていたS児も、「踊れー」「みなさーん」「がんばれー」などと、舞台に向かって叫んでいた。その言葉につられたように、舞台の上の女児らも、少しずつ手や足を動かし始めた。S児は客席の後ろに行き、音楽に合わせて体を動かして楽しんでいた。次第にE児、B児、D児はジャンプしたり、回転したり、体を動かして踊り始めた。しかし、E児とG児が舞台の立ち位置でもめ始めた。その時、タイミング良く、S児が言った。

S児 「ケンケンもするんだよー」

大きな声で舞台に向かって声をかけ、その後、教師の方を見た。S児は照れながらもサイドステップ、回転、ジャンプをして踊っていた。舞台の上でもD児がケンケンを始めた。E児、G児、P児も手を上にあげたり、回転したり、ジャンプしたりし始めた。

S児 「回って、ケンケン」(舞台の人に聞こえるように言った)

その言葉で、D児はケンケンをしながらその場で回り始めた。G児が両手を上にあげてその場で回転した。しかし、G児の動きはS児の思いとは違う動きだった。

S児 「次は回ってケンケン。(実際に、片足でケンケンをしながらその場を回りながら) こう」

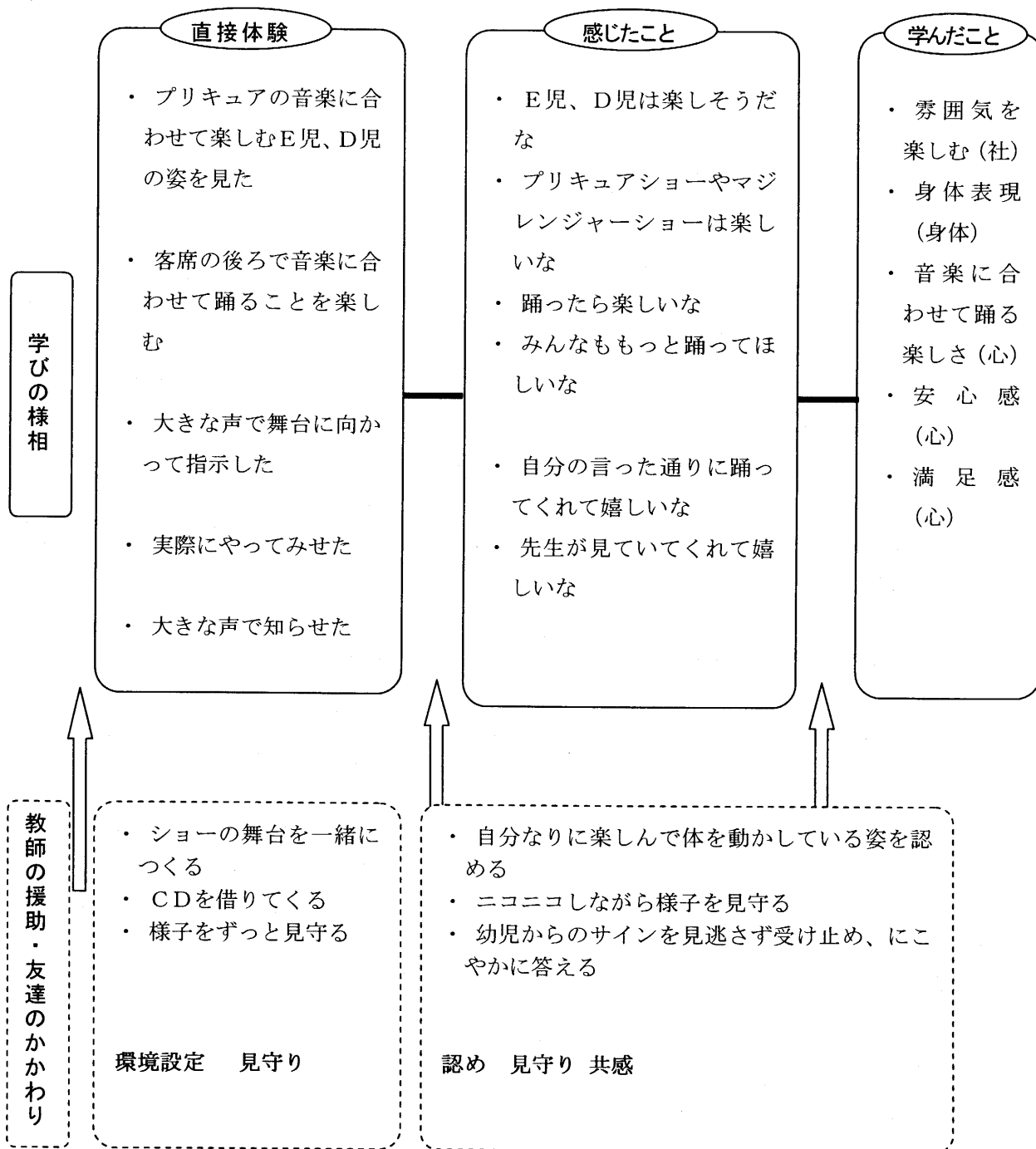
S児の姿を真似て、G児、P児が同じようにやり始めた。S児は「そう。そうだよ」と、舞台の様子をみていた。音楽が最後の部分になると、

S児 「キラキラ。こうやって（実際に両手を斜め上に伸ばし手を動かしながら）キラキラ」

その言葉につられて、G児が真似をしている。音楽が終わる時、S児はジャンプした。その姿を真似てG児もジャンプをしてダンスが終わった。S児は満足げな表情で教師の方を見たので、教師はにこやかに頷いた。そしてS児は「次はマジレンジャーショーですよ」と、みんなに告げた。



## <「学び」の様相と教師の援助>



## <今後に向けて>

- ・ みんなと同じ場所で楽しい雰囲気を十分味わえるように、時間をたっぷり保障していく。
- 場合によっては教師も一緒に楽しむ。

### 3 歳児 学年のまとめ

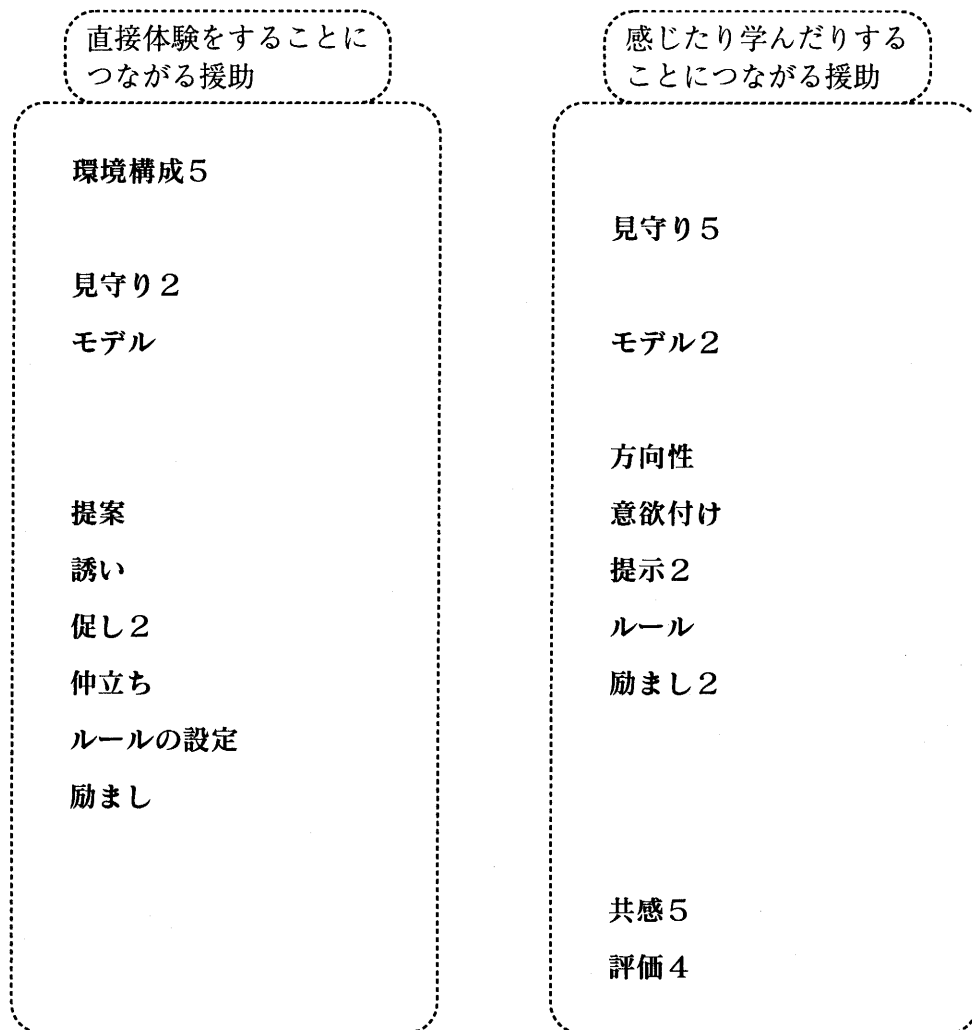
#### 1. 「学んだこと」について

#### ～ 「学び」 につながる 4 つの側面 ～

身体的側面	知的側面	心的側面	社会的側面
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 体の使い方（事例 2）</li><li>・ 力のかけ具合（事例 2）</li><li>・ ジャンプするタイミング（事例 5）</li><li>・ 飛び方（事例 5）</li><li>・ 身体表現（事例 6）</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 道具の使い方（事例 2）</li><li>・ 柱と柱の間隔（事例 2）</li><li>・ 絵の描き方（事例 3）</li><li>・ 面のつくり方（事例 4－1）</li><li>・ 洋服のつくり方（事例 4－2）</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 安心感（事例 1、6）</li><li>・ 不安感（事例 1）</li><li>・ 不満足感（事例 1、3）</li><li>・ 自尊心（事例 2）</li><li>・ 自負心（事例 2）</li><li>・ 満足感（事例 2、3、4－1、6）</li><li>・ 自信（事例 3、4－2）</li><li>・ 好奇心（事例 4－1）</li><li>・ 期待感（事例 4－1）</li><li>・ 音楽に合わせて踊る楽しさ（事例 6）</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 言葉と行為の一体感（事例 1）</li><li>・ 楽しい雰囲気（事例 1）</li><li>・ ルール（順番）（事例 1）</li><li>・ 友達と一緒につくる楽しさ（事例 4－2）</li><li>・ ルール（合図に合わせて飛ぶ）（事例 5）</li><li>・ 役割分担（事例 5）</li><li>・ みんなで遊ぶ楽しさ（事例 5）</li><li>・ 雰囲気を楽しむ（事例 6）</li></ul>

- ・ 身体的側面を見ると、ジャンプしたり踊ったりしながら、自分なりに体を動かす中で、基本的な動き方を身につけている。
- ・ 知的側面を見ると、道具や用具の使い方、物事のやり方など、具体的に一つ一つのことを学んでいることが見えてくる。
- ・ 心的側面を見ると、安心感、自信、満足感など、心の安定が生活づくりのベースになっていることが見えてくる。
- ・ 社会的側面を見ると、初めての集団生活の中で教師や友達と一緒にいる楽しさを学んでいることがわかる。3 歳児の生活において“楽しさ”が基盤になっていることがわかる。

## 2. 教師の援助について（3歳児）



\* 数字は、事例で取り上げられた援助の回数である。

- ・ 直接体験することにつながる援助では、教師自身が楽しい、おもしろいと感じる環境づくりをしながら、幼児らがやってみたいと感じるよう誘ったり、促したりすることが大切である。それと同時に、モデルとなる教師や友達がそばにいることが基本である。
- ・ 感じたり、学んだりすることにつながる援助では、教師がモデルとなったり、暖かいまなざしで見守ることが大切である。教師が一緒にいることによって、幼児が何かを学んでいると感じることが基本である。